



「よその船には 絶対負けない」。 仕事のスピード感に 日本一の自負

大新土木株式会社
船舶管理部船団長「第27大博号」船長
米田 久夫（よねだ・ひさお）

海^{うみ}

現場最前線

人^{ひと}

叔父さんが大新土木で船長を務めていた縁で 1990（平成2）年、26歳の時に入社した。浚渫船に乗り込み最初に任されたのは、正確な施工に不可欠な光波測量の仕事だった。

「はじめは位置決めが何かも分かりません。船に乗り込みとにかく仕事を一から覚えました。船内での生活になかなか慣れず、陸に上がりたくて仕方がなかったですね」と、若かりし日の自分を振り返る。朝から晩まで仕事漬けの日々。重圧に負けそうな気持ちを奮い立たせたのは「自分がしっかり稼いで家族を支えなければだめだ」という思いだった。

入社2年目でいったん浚渫船を下り、社内で別の仕事に従事。1996（平成8）年に第27大博号が竣工したのと同時に現場での仕事に復帰し、それから21年という長い月日を大博号と共に過ごしてきた。

「この船は会社で一番最初にGPS装置を搭載しました。最初は甲板長としてGPSの操作を任せられました。半年後には初代の船長が定年退職され、1997（平成9）年の3月から2代目の船長として指揮を執り始めました」。

船長としていつも心掛けているのは「仕事でよその船には絶対に負けたくない、負けない」という強い気持ちを持ち続けること。全国で稼働する浚渫船の多くが27m³のグラブバケットを搭載する中で、大博号は

ひと回り小さい18m³で作業に当たる。「現場の移動を含めて仕事のスピードは大博号が日本一だと自負しています。仕事は段取りと要領で決まります。無駄を省くには何をしなければいけないのか。若い船員にはこのことをしっかりと考えてほしいですね」と話す。

社内では仕事に対し厳格な船長で有名だが、経験を積んだ今でも「操船は緊張するし翌日の仕事心配になって寝られないこともある」という。風速や風向、潮流を頭に入れて出航前に操船をシミュレーションする。安全を第一に考え、自信を持って仕事と向き合うためのルーティーンは、経験を積みながら自分自身で固めていった。

ベテランの域に入った今は、次の世代を育てることも重要な仕事の一つ。後進の指導では「自分の仕事ぶりを見せるのではなく、とにかくやらせて見守ることが大切だ」と考えている。モットーは「習うより慣れる」。若い船員には「常にイメージを持って頭と身体の両方で仕事を覚え込め」と言っています。

最前線で指揮を執りながら、少しずつ成長していく後輩たちの姿も見守り続ける。仕事に対する真摯な姿勢は、長い現場での経験によって培われてきた。「うちの船はよほどのことがない限り、仕事は早めに切り上げる。メリハリを付けることは結果として、効率良く仕事を行うことにつながると考えています」。



グラブ式浚渫船兼起重機船「第27大博号」

船体寸法＝全長 56.0m × 幅 21.6m × 深さ 4.0m、喫水 2.0m、総トン数 1,708 t

浚渫仕様＝グラブバケット容量18m³、浚渫深度－50m、直巻能力 70 t

起重機仕様＝定格総荷重 160 t、作業半径 37m

3本のスパッドで船体の前進・後進を俊敏に行い、他船に負けない作業効率を誇る。船のメンテナンスにも船長をはじめ乗組員が積極的に関わり、仕事がしやすい環境づくりに気を配っている。